

マレーシアのサイノフォン文芸誌 『蕉風』書誌ノート¹⁾

舛谷 鋭

はじめに

東南アジアの非国語あるいはマイノリティ言語による新聞、雑誌は、それぞれの国語刊行物と異なり、公立の図書館や文書館、大学など研究機関の図書館でも死蔵や放置、あるいはそもそも収集されないことも多い。しかし、最近もインドネシアの『共栄報』など、中国語新聞が日本人研究者によって台湾で復刻、日本で発売される[津田 2019]など、未開の地域情報資源の共有という観点で可能性がある。

本稿は言語を問わずプロ作家がほとんどいない東南アジアの文壇において、奇跡的に60年間、500冊以上刊行されているマレーシアの中国語文芸雑誌『蕉風』(*Bulanan Chao Foon*)の現時点で判明している書誌状況を中心に紹介する。

発刊の経緯

1955年に方天(張海威)の主編で発刊した『蕉風』はシンガポール発行ながら、当初香港でも読まれるほどの文芸性の高さを誇っていた。これは、中国大陸から香港経由でマラヤに渡った多作な長篇作家黄崖が編集をつとめたり、香港や台湾から徐速、劉以鬯、白先勇、余光中らの有力な作家の作品を掲載していたりしたためである[黄傲雲 1986, 28]。

張海威は毛沢東に追われた中国共産党の有力者、張国壽の実子であり、こうした創成期に関わった作家文人の移動とライフストーリーは、冷戦初期の資

1) 本稿は京都大学東南アジア地域研究研究所CIRASセンター共同研究「東南アジアの中国語文芸誌研究——『蕉風』を中心に」(Study of Sinophone magazine “*Bulanan Chao Foon*” at Malaysia、代表:舛谷鋭)の成果の一部である。

料的空白を埋める意義がある。『蕉風』発刊詞は次の通りだ。

「文化の砂漠」という四文字でマラヤの文化を形容する人がいるが、このことばは妥当でなく、マラヤの文化人にとって一種の揶揄であろう。(中略)

マラヤはわれわれ中華民族が全人口の半分以上を占め、今後長きに渡りわれわれは他のマラヤの民族と協調し、ともに生活して行かねばならない。(中略)

文化界の友人達と上記のような問題を話し合う度に、共通して感じ一致して思うことは、今日のマラヤに純マラヤ的な文芸雑誌を創刊することが急務だということである。(後略)[蕉風創刊号]²⁾

冷戦下『蕉風』の道のり

『蕉風』は1950年代末には発行地を当時のマラヤに移し、その後も中国語を非国語とする地域では最も充実したマレーシアの中国語教育制度、支援に支えられ、華人の民族文学の発表の場として、主に現地華人の投稿によって継続してきた。中国大陸以外の中国語文壇で屈指の長篇作家で、1987年の国内治安法発令時にマレーシアを離れ、その後1992年にタイで客死した前述の黄崖や、アジア通貨危機後の1999年まで物心共に『蕉風』を支え続けたマレーシア華人文学大賞(1993)作家の姚拓ら、主に香港経由で東南アジアに「南下」してきた『学生週報』ゆかりのサイノ

2)『蕉風そよぐオアシス——創刊詞』『蕉風』1期(384期にも再録されている)。

フォン（華語話者文学³⁾）作家たちがかわり、最初の40年で『蕉風』の土台が築かれた。これまで華人文学の正史であった現実主義と呼ばれるリアリズム系の方修文学史では『蕉風』は傍流だが、文学的な質と読者数で凌駕していた『蕉風』現代派と呼ばれるモダニズム系の、黄崖、姚拓ら華僑一世作家と後に作者となる彼らの読者の関係性から、今世紀に入ってからの「台湾熱帯文学」⁴⁾（台湾馬華文学）への流れが確認できる。

『蕉風』はマレー文学やインドネシア文学など、東南アジアの国語文学や、台湾文学、中国現代文学の紹介の場を果たすとともに、現代派作家の牙城であり、それらは社会主義流で、後述の方修文学大系によって構築され、1980年代まで本流と捉えられてきた現実主義文学と常に対峙してきた。冷戦下のイデオロギー対立の1つである、リアリズム対モダニズムは、初期『蕉風』のなかではせめぎあい、のちに後者で埋め尽くされる。

書誌的には、海外華語媒体で常に問題となる使用字体の問題に触れておくべきだろう。『蕉風』は当初繁体字で、435期（1990年3・4月）から簡体字の採用を始め、437期（1990年7・8月）では大部分で簡体字を採用している。これはマレーシア国内の華語教育が簡体字で行われているため、繁体字のままでは識字できない層が増えたための措置だった。インドネシアではスハルト政権下で一貫して漢字、特に共産中国のシンボルである簡体字が禁止だったことを思えば、背景としてはバリン会議後でマラヤ共産党の明瞭な退場ということも影響しているかもしれない。

マレーシアでは若者達は簡体字を学んでおり、『蕉風』は繁体字を堅持し続ければ『蕉風』を読める者は段々少なくなり、市場も益々狭くなり、この先続けていけなくなるおそれがあります。よって『蕉風』を簡体字に変えて印刷することを繁体字擁護の読者、作者、編者に懇願するものであります。簡体字が美観と正確さにおいて繁体字に及ばないことは認めざるを得ません。しかし簡体字

3) 多文化社会東南アジアの文脈では、華語系華人文学と言ってもよいだろう。

4) 台湾馬華文学はジャンル化し、日本でも「台湾熱帯文学」シリーズ（人文書院）として2010から2011年にかけて4冊が翻訳出版された。

を使っている国の文学水準がそのために衰えているとも思えません。『蕉風』の水準を保つことは必要で、また『蕉風』を売ることも必要なのです。私たちは今号から徐々に簡体字の採用を進めて行きます（後略）〔「編集記」435期〕。

「マラヤ」華語文学雑誌として

1970年代には現代シンガポールを代表する芸術家、陳瑞獻（Tan Swie Hiam）も『蕉風』の編集をつとめている。1965年以前は「マラヤ」としてマレーシアと一体であったシンガポールの華語文芸だが、現在ではマレーシアの華人作家は意外とシンガポールと疎遠なケースが多い。その点『蕉風』はシンガポールに発売所（友聯書局）を持ち、少なくとも1970年代まではシンガポールで意見交換の場を設けたり、投稿を多く受けたりと接点があった。陳瑞獻については、2021年新曆晦日のマレーシア『星洲日報』文芸副刊「文藝春秋」で特集が組まれ、陳の『蕉風』との関係が1980年の月刊時代⁵⁾の11月332号の陳特集を回顧、引用して書かれている〔李 2021〕。

一方、マレー語文学を華語翻訳で紹介するいわゆる華馬文学は、1980年代までは「マレー文学作品選訳」や「マレー文学講座」などが見られたが、それ以降は掲載なく、国立言語・書籍局（Dewan Bahasa dan Pustaka: DBP）の翻訳情報委員会華語チーム（1983）を前身とする、マレー語が堪能な馬華文学作家によるマレーシア翻訳と創作協会（創訳会）の活動へ道を譲った感がある。

実質的によやく年刊という復刊前後以降はタイミングが合わないが、90年代までは国際的な認知の基準という面からノーベル賞に相当の関心を払っており〔舂谷 1992〕、受賞者決定後に刊行された年末出版号にはその年の受賞作家の作品とプロフィールが紹介されていた。中でもラテンアメリカのスペイン語文学への国際的評価は、地域と言語源流に食い違いのあるポストコロニアル文学の世界文学としての評価、たとえばラテンアメリカ～スペイン語文学、マレーシア～中国語文学という共通点から馬華作家を鼓舞したと思しい⁶⁾。同様に移民文学への関心も高

5) 1990年から隔月刊に変更されている。

6) 『蕉風』391期（1986年5月）にラテンアメリカ文学特集が掲載されている。

く、関連するものに「現代ソ連移民詩人特集」(『蕉風』410期、1987年12月)などがあつた。

海外文学の中で特に注目したいのは台湾文学の紹介である。華人作家が華語同時代文学の前衛を知ろうとすれば、まず母語の文献を探すのが自然だが、中国語訳となると台湾、香港出版のものに頼ることになる。文革後の中国新時期文学において台湾現代派文学へ関心が払われたことに先んじて、マラヤの華人作家の一部は冷戦下では反共の砦、民主化以前の台湾の文学を高く評価していた。あくまで一方通行であったこの間の事情を、『シンガポール共和国華文学選集』[柏 1982]を編集した台湾作家柏楊は次のように述べている。

シンガポール、マレーシアとの文化交流はすべて中国語を媒介としております。更にこれらの国は台湾文壇を大変良く理解しています。ところがわれわれはそれらの国の文壇について少しも理解せず、大変不公平です。これは台湾にとって損失であるとも言えます。なぜならシンガポールやマレーシアの文壇は成果をあげているからです。少なくともある作家達の作品はとてもレベルが高いと思います。また一方でシンガポール、マレーシアの文学史を編纂することは文化交流を進めることにもなります[蕉風 350期]。

冷戦後の台湾におけるモダニズムは担い手の欧米留学経験などからも、西側直系と言える。たとえば小説におけるモダニズム手法を代表する「意識の流れ」が、中国語では前述の劉以鬯によって60年代に初めて使用されたが、大陸では改革開放後の新時期文学で王蒙によってようやく使われたことは一例として挙げられる。こうした台湾などから伝わった現代派文学に対して、馬華文学の本流は中国経由の現実主義文学であると言われていた。しかし80年代時点でも現代派は数十年の文学的営為を積み重ねていた。彼らの文芸作品についても散逸を防ぐための資料収集が、特に出版物以外で急務であろう。元マラヤ大学中文系の故陳応徳は『蕉風』誌上で『馬華新文学大系——1960～1990』の編集を提唱している[蕉風 445期]。確かに方修編の『馬華新文学大系』が1919年から1956年まで(詩集は1971年まで)、苗秀ら編

の『新馬華文学大系』は1945年から1965年までで、他にも1980年代までの作品を網羅したアンソロジーはあるが、それらはいずれも現実主義作家の作品が中心で、特に1960年代以降の現代派作品がすっぽり抜け落ちている。

一方、『蕉風』の編集者の姚拓は馬華文学の文芸理論を現実主義、社会主義リアリズム、芸術至上主義、現代派の4つに分け、現代派の説明として以下のよう述べている。

(前略) 4つ目は現代詩を書く青年作家達で、現代派と呼ばれる。現代詩が最初に現れたのは1959年『学生周刊』誌上である。その後だんだん多くなり、現在『蕉風』は現代派の牙城と言われている。実際には『蕉風』の作品すべてが現代派の作品という訳でない。しかし『蕉風』が現代派の作品を最も多く掲載している雑誌であるということも、また事実である[蕉風 394期]。

馬華文学の伝統である現実主義文学の呪縛から逃れるために、馬華文学は台湾から現代派文学を受容した。そして台湾文学が1960年代にモダニズム受容をしたことを、大陸文学にないひとつの達成として受け止めている。このように、台湾文学がアジアを中心にサイノフォンを理論的に先導した時期があることは間違いない。

しかし現代派作家は現実主義作家ら現地派から遠ざけられがちであった。確かに台湾留学経験者と現代派作家は多くの場合に重なっている。とはいえ、現代派作家と作品はすでに50年を超える蓄積がある。たとえば、2021年11月にベテラン作家張弓(1939-2021、本名は張子深、他のペンネームに張寒)の訃報が伝えられているが、そこでは高校生のときに『蕉風』に投稿を始めたところから文業が紹介されている。

なお、中国、台湾、マラヤという三角関係で見た場合、1930-40年代の中国文学との関係を断ち切られた戦後台湾文学や、台湾作家の中国語による文学的実験を目にしなかった中国大陸文学に対して、実は馬華文学は非常に有利な立場にあった時期があるという事実は見逃せない。大陸で改革開放が始まらんとする年に、以下のようなエッセイが『蕉風』に掲載されている。

こうして見ると、シンガポール、マレーシア、香港の華語作家は何と幸運なことだろう！中国文学のすべての伝統が、詩経から五四文学に至るまで彼らに対しては中断していない。しかし台湾作家について見るとまさに中断している。先輩の五四作家が何を書いたのか、何を試したのか、また西洋文芸思潮として何を紹介したのかも知らない。台湾の作家にとって中国文学は清朝まで終わり、五四口語新文学は無かったことになっている〔頼 1978〕。

『蕉風』を巡る人的リソース

姚拓の「蕉風は文芸誌であり、文芸学校でもある」⁷⁾という言葉通り、『蕉風』は誌面を通じて数多くの作家を育ててきた。編集に携わるのも専門編集者でなく若手の作家達で、特に1970年代以降、『蕉風』から育つ書き手や、華語新聞の文芸副刊編集者は数多い。

そんな中で現在でも「蕉風の保母」〔鄭 1985〕として編集の地位にあり、経済的な支柱でもあるのが他ならぬ姚拓である。

姚拓は1922年河南省の生れで、1950年に香港に移り『中国学生週報』の編集に携わった。その後1957年にシンガポールで学生週報社が設立され、この『学生週報』(後の『学報半月刊』)編集のためにシンガポールへ渡ってきたという。1985年の『蕉風』30周年記念特別号で、経済面も含めて以下のように述懐している。

隠しだてすることはないと思うが、『蕉風』には毎月必ず欠損があり、こうした赤字は一切クアラランプールの友聯文化事業有限公司の負担になっており、月に凡そ2,000から2,500リングに上る。『蕉風』を印刷しているマラヤ印務公司も友聯文化有限公司の関連会社の一つで、『蕉風』はタイプ、組版、印刷という基本的な問題をクリアできたからこそ、厳しい中でも今日を迎えることができた。マラヤ印務公司の『蕉風』に対する貢献は大である。もちろん友聯文化事業公司の助けがなければ『蕉風』はとっくに停刊になっていたろう。ある理事が冗談めかして言った。「月2,500リングで30年ならビルが建つじゃないか」。

7) 筆者の聞き取り(1991年2月28日)による。

『蕉風』創刊30周年記念号誌上を借りて、私はもう一度皆さんに説明しようと思う。毎月2,500リングのマイナスがあって、30年もの長きに渡り文芸誌を続けられるのだろうか？

私は思う。雑誌の出版経費を維持することは非常に重要である。が、さらに重要なのは、「誰」が手を煩わせつつ、怨みを買いつつ文芸誌を編集し続けるかだ。

『蕉風』が1955年11月に創刊されて以来、歴代の編集、主編が全ての義務を負ってきた。こうした伝統は今日に至るまで変っていない。このようなたわけた編者たちが一代また一代と引き継いでこなかったなら、『蕉風』が今日まで出版されていることは決してなかったろう。

『蕉風』にいったいどれだけの編集者が関わってきたかは、30年後の今日では私にもはっきりしない。創刊した頃私は香港にいてまだ南来していなかった。当時主編は方天で編集委員には申青、馬摩西、范経、李如霖、陳振珽(白蒂)がいた。私は1957年2月にシンガポールに着き、編集に加わった。1959年、マラヤ印務公司がクアラランプールにでき、学生週報と蕉風はクアラランプールに移って出版されることになった。この頃方天がカナダに移住し、シンガポールの編集委員がいなくなったので主編は彭子敦に代わり、続いて黄思騁、黄崖が主編を勤め、大体1970年から後は編集に加わる者も多くなった。白垚、周喚、谷川、肖凌、牧玲奴、張錦忠、周清嘯、紫一思や現在の梅淑貞らである。『学生週報』(後の『学報』)と『蕉風』はずっと姉妹雑誌だったので、『学報』の編集を担当すれば必ず蕉風の編集委員になった〔姚拓 1985〕。

一方、姚拓と共に香港から南来し、ネームバリューを活かして香港にも販路を拓いた黄崖は、姚拓より10歳年下の1932年生まれである。やはり香港の『中国学生週報』編集を経て1959年クアラランプールに来て華語新聞の文芸副刊の編集を担当し、『蕉風』では1959年から10年ほど編集に携わっている。

こうした中国生まれの移民第1世代の編集者の他、1980年代になると現地生まれで『蕉風』を読んで育った梅淑貞、張錦忠、王祖安、許友彬らが編集に加

わっている。特に1987年から2年間主編を務めた王祖安は、その後『星洲日報』の文芸副刊「文芸春秋」編集部に移っている。また444期(1991年9・10月)から481期(1997年11・12月)にかけて現地の高等教育機関であるマラヤ大学卒の小黑が夫人の朶拉と編集に加わっている。さらにこの号から編集顧問(複数)——編集執行(1名)体制が編集顧問(複数)——編集執行(複数)になり、姚拓は前者から後者に名を移している。

小黑は編集に加わった444期の巻頭でマレー文芸誌を引き合いに出し、次のように述べている。

良い雑誌は必ず優れた作家達の強力な支持があり、素晴らしい秀作を提供してくれる。これが大変重要なポイントである。(中略)刊行物について言えば、マレー文学雑誌『文学月刊』(Dewan Sastera)に最も興味を覚えます。この雑誌はマレー文壇の代表誌で、シャノン・アフマド(Shahnon Ahmad)、A.サマッド・サイード(A. Samad Said)、ウスマン・アワン(Usman Awang)ら著名作家が大作を発表する他、ディンスマン(Dinsman)のような若い前衛作家から大学で教鞭を執る学者(例えば最近国家文学賞を受賞したハジ・ムハンマド・サレー(Hj Muhammad b. Salleh)教授)も強く支持しており、しばしば雑誌に文学問題の探究稿を載せます。ここからマレー文学の盛んさが感じられ、瞠目させられます。ここ数年、華字新聞の文芸版は増えたものの良田も耕す者なしといった体です。国内のいくつかの文芸誌も道の両側の良田をほうり放しのままです。これはまともな状況ではありません。『文学月刊』を読んでいると羨望の他、境界に立たされた者は深く考えます。時代は経済発展に向かい、社会も急変しているのに、馬華作家は更に自己強化を図るべきでないのか?更に真剣に、更に積極的に文学事業を發展させていくべきではないのか?〔「編集記」444期〕

この期以降「東南アジアのマレーシアの中の華人」といった視点の記事が増しており、上記のDBPの文学賞の推移と歴代受賞者の紹介〔碧澄 1991〕やタイ国が設けている東南アジア作家賞を受賞したマレー

人作家の紹介〔碧澄 1992〕などもある。

復刊まで

こうして、奇跡的に50年近く刊行され続けていた『蕉風』だったが、1999年2月、488号で停刊するに至る。アジア通貨危機に伴うマレーシア経済低迷の中でも、装丁を変えたり、中学生向けの『少年蕉風』を添付したりと工夫していたが、蕉風出版基金会の設立も空しく休刊に及んだ。創刊当初から毎号赤字を出し続けていた公称2,000部の文芸誌が生きながらえたのは、実業家としても成功した姚拓を中心とする華人作家らの無償の庇護によるものだったが、それも積み重なる欠損には耐えかねた。

しかし華人社会は『蕉風』を、馬華文学を見捨てなかった。シンガポール対岸ジョホールバルの、華人系私立カレッジである南方大学学院図書館内に設置された「馬華文学館」を中心に、2002年末に復刊が決まり、2003年に『蕉風』489号から再発行が果たされた。復刊時の主編はシンガポール在住のマレーシア人で自身作家でもある許維賢で、地の利を生かしシンガポール、台湾など、執筆陣と販路を拡大した〔馬華文学館 2022〕⁸⁾。

その後主編は南方学院勤務のサラワク出身作家、許通元が務め、復刊当時は年2回の半年ごとが目標だったものの、2004、2008、2010、2012、2013、2015～2019、2021の年刊となり、514号まで発行され、515号の原稿募集がポストコロナ、90年代生まれ(九字輩)作家などのテーマで始まっている。しかし、早くて年1度という時間のかかっている状況で、連載をしふる作家もいるようだ⁹⁾。

蕉風研究の高まり

『蕉風』本誌や70年代から90年代にかけて70冊近く出版された「蕉風叢書」を馬華文学のテキストとして読む研究でなく、文学雑誌としての研究については、2010年に『シンガポール文学現代主義文学運動

8) フェイスブックの「蕉風 Chao Foon」ページも参照 (<https://www.facebook.com/groups/273462052799/>、2022年1月1日閲覧)。

9) 南方大学学院(南院)の世界ランキング重視、英語化への変質に対して、ジョホール出身者を中心にマレーシア華人社会への公開書簡が発表される状況もある〔黄 2022〕。

研究』が出版され、シンガポールの新聞文芸副刊とともに復刊以前の『蕉風月刊』が対象となっている[方2010]。シンガポール国立大学(National University of Singapore: NUS)にも2010年代以降、サイノフォン研究で『蕉風』を資料の一部とした博士論文はあるようだが、タイトルに明記されているものはない。一方南洋理工大学(Nanyang Technological University: NTU)では、以下の通りタイトルに『蕉風』を冠した博士論文が同じく2010年代以降に3編現れている。

- 陳苗苗(2014)『《蕉風》的馬來亞化(1955-1959)』
- 賀淑芳(2017)『《蕉風》創刊初期(1955-1960)的文学観通変』
- 楊哲欣(2021)『『姚拓』与《蕉風》(1955-1963)的反共論述』

特に賀淑芳は日本語翻訳もある馬華文学の現役作家で知名度も高い。こうした2010年代資料を活用した書籍が、夫の張永修とともに『蕉風』復刊前最後の7期の編集経験もある、現プトラ大学(UPM)外国語学部中国語文学科教員の林春美の『《蕉風》与非左翼的馬華文学』である[林2021]。創刊の1950年代から1970年代までを扱ったこの研究書は、NTUの学位論文同様、冷戦下の馬華文学で主流だった現実主義文学と対照的に「非左翼」現代派文学を描いている。これまでも囁かれ、米国公文書公開資料の活用も少なからず出始めたところだが、創刊から1999年の休刊までの版元友聯文化機構へのアメリカアジア基金会からの反共資金援助によって、この冷戦下の文芸雑誌はプロパガンダと言い切ってもよいかもしれない。私見は別稿に譲るが、現在「文化英雄」としてマレーシアの私立中高生や華人カレッジ生に仰ぎ見られている留台作家らのサイノフォンが、馬華文学伝統の現実主義文学より『蕉風』を中心に醸成されてきた現代派に接続していることを指摘しておきたい。

『蕉風』はどこで読めるか

林(2021)の出版後に、日本の台湾文学研究者から『蕉風』はどこで読めるのかという問合せが数件あっ

た。大部ながら日本でも2巻本で翻訳出版された陳芳明の『台湾文学史』(2011、邦訳2015)の一節「馬華文学の中国性と台湾性」が台湾馬華文学を論じ、「その言説を1980年代以降の歴史的脈絡から引き抜いてしまったなら、台湾文学は当然、巨大な欠損部分ができるであろう」と記していることと無関係ではないだろう。それは台湾「原住民文学」などとともに、中国大陆にはない台湾独自の文化要素の一部なのだ。

『蕉風』復刊後の489号以降は、台湾の華藝線上図書館(<https://www.airitilibrary.com/>)で高価ながら記事ごとにダウンロードできる。問題は創刊号から488号で、揃いで持っているのはジョホールバルの馬華文学館と南洋大学資料を受け継いだNUS中文図書館だが、所蔵調査中に欠号を照らし合わせたところ、両館が寄贈交換すれば揃いになることに気づき、筆者自身が橋渡しできたのはよい思い出。

日本ではマラヤ大学教員だった呉天才の蔵書(Goh Collection)を立教大学図書館が購入した際に混ざっていた分と、姚拓氏より筆者が手渡された分、そして筆者の個人所蔵分を寄贈し、1966年から欠号ありだが488号まで、復刊後分489号以降は内山書店に国内代理をお願いし日本でも入手できるようにし、もちろん立教大学図書館では定期購読して、製本保存している。京都大学図書館でも収集が開始され、日本国内でも東西で現物の一部を手にとって見られるのは吉報だろう。なお、2016年にNUSが制作した電子版について、館内利用のみになるが立教大学と京都大学で入手予定であることを記しておく。

その他、クアラルンプールのスランゴール中華大会堂内の華社研究センター集賢図書館にも姚拓氏寄贈分などがあつたかと思うが、揃いにはほど遠かった。カジャンの新紀元大学学院の陳六史図書館の方が、方修書庫や李錦宗馬華文学資料館など、近年現地文芸資料収集と現地華人からの寄贈を積極的に受け入れており、今後の馬華文学資料拠点として期待できる(表1)。南洋大学設立の立役者、陳六史の名を冠した図書館を持つ、元ムルデカ(独立)大学予定地に立つ華人カレッジならではの親和性であろう。

表1 新紀元大学学院の復刊以前の『蕉風』の収集状況

陳六使図書館	41, 97, 106, 110, 111, 115-119, 121-133, 135, 138, 142, 146-168, 173-179, 181-183, 187, 188, 202, 205, 207, 208, 211, 215-234, 236-254, 256-264, 266, 268-360, 362-367, 369-379, 383, 386, 387, 391-398, 400-418, 420-429, 432-457, 459-488
方修書庫	1, 4, 5, 25, 28, 30, 34, 46, 47, 49, 51, 52, 54, 57-59, 63, 67, 69, 79, 82, 120, 134, 136, 137, 144, 145, 151, 153, 155-157, 161, 167-172, 174-178, 180, 181, 183, 185, 186, 188, 191, 194, 195, 197-207, 209-214, 217, 221, 227-229, 231, 233, 235, 237-245, 247-249, 254-256, 258, 260-262, 272, 284-286, 291, 292, 297, 298
李錦宗華文学資料館	11, 25-36, 49-72, 83, 85, 86, 96, 98, 102-105, 107-109, 155 (1965/9) -160, 174-184, 186, 188-199, 201, 203-243, 245, 246, 248, 249, 251, 252, 254, 256-261, 263-281, 283-298, 300, 302, 304-307, 309, 310, 312, 314, 317-338, 340, 343-366, 368-382, 385-405, 407-417, 419-425, 427-439, 441, 446, 448, 449, 455, 456, 458, 462, 469, 475, 476, 487, 488

参考文献

『蕉風』

350期、1982年6月。

384期、1985年5・6月。

394期、1986年8月。

445期、1991年11・12月。

『蕉風』掲載記事

碧澄 (1991)「Muhammad Haji Salleh 第6回国家文学賞受賞者」『蕉風』444期、1991年9・10月。

碧澄 (1992)「第13回東南アジア作家賞受賞者、Jihaty Abadi」『蕉風』448期、1992年5・6月。

「編集記」『蕉風』435期、1990年3・4月。

「編集記」『蕉風』444期、1991年9・10月。

頼山舫 (1978)「五四作家」『蕉風』303期、1978年5月。

姚拓 (1985)「老いてなお盛ん、壮心は止まず」『蕉風』384期、1985年5・6月。

日本語論文・書籍

津田浩司監修・解題 (2019)『共栄報 1942-1945』第1冊～32冊、別冊、ゆまに書房。

舩谷鋭 (1992)「マレーシア華語華人文学の過去と未来」『海燕』1992年10月、pp. 202-203。

華語論文・書籍

柏楊 (1982)『新加坡共和国華文文学選集』台北：時報文化出版。

方桂香 (2010)『新加坡華文現代主義文学運動研究：以新加坡南洋商報副刊《文芸》《文叢》《珈琲座》

《窓》和馬來西亞文学雜誌《蕉風月刊》為個案』新加坡：創意圈出版社。

黄傲雲 (1986)『中国作家与南洋』九龍：科華圖書出版公司。

黄建榮 (2022)「盼南院回帰初衷」『星洲日報』2022年1月22日。

李有成 (2021)「陳瑞獻与『蕉風』」『星洲日報』2021年12月31日。

林春美 (2021)『《蕉風》与非左翼的馬華文学』台北：時報文化出版。

馬華文学館「蕉風復刊」〈<https://www.southern.edu.my/mclc/jiaofeng.php>〉

鄭百年 (1985)「自序」『中央之國』蕉風出版社。

马来西亚的华语语系文学杂志《蕉风》备忘录

马来西亚历史最悠久的华文文学杂志《蕉风》于1955年首次出版。创刊词〈蕉风吹遍绿洲〉说，有人常以「文化沙漠」四个字来形容马来亚文化，这句话是非常不公道，并且对于马来亚的文化人来讲，显然是一种揶揄。……星马两地，我们华族后裔占了全部人口的半数以上，在今后悠长的岁月里，我们还要与其他马来亚民族协调的生活在一起。……一起认为在今日的星马，创办一份纯马来亚化的文艺刊物，实在太需要了。《蕉风》出版后三十年间都是冷战时代。《蕉风》也是由从中国大陆南下的第三势力开始出版的。但马华文学传统的五四运动源流现实主义文学和《蕉风》现代派文学好像是冷战东西对立一样分开。这世纪以后的冷战研究来看《蕉风》是文化冷战的典型例子。它也是这世纪10年代开始的华语语系文学的摇篮。我们冷战背景，现代派作品，南来作家的三方面可以分析这份杂志。

Bibliographic Note on Sinophone Magazine “*Bulanan Chao Foon*” of Malaysia.

Bulanan Chao Foon, Malaysia's longest-running Sinophone literary magazine, was first published in 1955. The inaugural issue, “Chao Foon Blows Over the Oasis,” stated that the term “cultural desert,” which is often used to describe Malayan culture, is very unfair and clearly disparaging of Malayan culture... We of Chinese descent make up more than half of the population in both Malaya and Singapore, and we will have to coexist with the other ethnic groups in Malaya for a long time to come... In both Malaya and Singapore today, there is just an even greater need for a purely Malayan literary publication. 30 years since the launch of *Chao Foon* have been the Cold War era. *Chao Foon* was also published by a third force that had migrated south from mainland China. However, the Mahua literary tradition of May 4 Movement realist literature and *Chao Foon's* modernist literature was separated as if they were opposing axes of the Cold War. A study of the Cold War since this century shows that *Chao Foon* is a characteristic of a cultural Cold War. It is likewise the birthplace of Sinophone since the 2010s. We can analyze this magazine from three perspectives: the context of the Cold War, modernist work, and writers to the south.